千葉・大崎城跡（おおさきじょう）

1　所在地　千葉県佐原市大崎
2　調査期間　一九九九年（平11）四月～一一月
3　発掘機関　㈶香取郡市文化財センター
4　調査担当者　原田享二・鬼澤昭夫
5　遺跡の種類　中世城郭跡
6　遺跡の年代　中世
7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

大崎城跡は、香西川とその支流に挟まれた舌状台地に位置する。城郭は四ヵ所の郭、及び斜面部から裾部の腰曲輪よりなり、南北八〇〇m東西三〇〇mである。

（佐　原）

大崎城は千葉氏から分かれた国分氏の居城と伝えられ、国分氏が大崎城へ移った時期は、鎌倉時代末期とされているが、正確な築城時期は明らかではない。廃城になったのは一七世紀初頭といわれる。

調査地点は主郭の北側裾部で、標高は一〇m前後である。調査面積は四二五〇m^2で、濠部と居住区に分かれる。弘化三年（一八四六）に描かれた絵図によれば、濠部は「はましま」、居住区は「城戸」と記されたところにあたる。

濠部からは幅三・四m長さ三五mにわたって地業を施した護岸状遺構を検出した。居住区は濠部の東側に盛土をして平坦面を造り出したもので、盛土の厚さは二mを越える。整地は最低三回確認でき、新しい面から順に第一面～第三面とした。各整地面より遺構を検出した。

護岸状遺構の地業や居住区の造りだしは一四世紀末を中心とした時期と考えられる。居住区はその後、整地を繰り返し一六世紀前半には第一面が整地されたと思われる。

木簡類は濠跡から七点出土した。このうち文字として釈読できたもの四点を紹介する。なお、釈読できなかったもののうちの一点は、両面に墨痕のある折敷の底板で、文字ととれる部分もあるが、全体として文字・文章の体裁となっていない。他に切り込みをもつ木簡の形状をした木製品が同じ濠跡から二点、居住区第二面の土坑SK二六から一点出土しているが、墨痕は確認できなかった。

SK二六は第一面を盛土・整地する際に第二面の不要物を廃棄するために掘削されたゴミ穴と考えられ、平面形は約五・五m×四mの長方形、深さは約一mである。網代・下駄・漆塗り椀などの木製

品類をはじめ、遺物が多量に出土している。

文字資料としては他に濠跡から出土した「宦」「遍香」「文」・「受」（同一個体）の墨書土器と「大一」と刻書のあるヘラ状木製品、居住区の盛土から出土した「□守（作カ）」の墨書土器がある。

8　木簡の釈文・内容

(1)

「日　月　ゐ　（キャカラバ　ア）（オンアボキャベイロシャノウマカボダラマニハンドマジンバラハラバリタヤウン）（ハツクソワカダ）＝

＝毎自作是念以何令衆生徳入無上堂即成就仏身　成意者為過□□信女　□

及至法界平等利益永禄四年辛…三日　敬白

(1417＋160)×径34　061

(2)・「銀将」

・「金　」

25×22×9　061

(3)

急々如律令

(63)×(26)×2　081

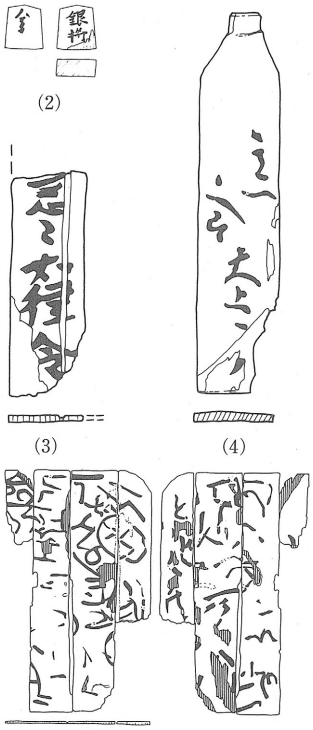
(4)

「V□□

□　□」

107×22×3　032

(1)



(2)　(3)　(4)

参考　墨痕のある折敷

(1)は永禄四年銘の卒塔婆である。樹皮を付けたままの桜材で、最上部は枝分かれの部分を残しY字状である。一面を削り墨書を施している。下方のごく一部を欠く。内容は発心門・梵字五文字、光明真言・梵字二八文字、法華経如来寿量品・漢字二〇文字、二行に分けて回向文である。寿量品には異字が三カ所見られる。上から順に「何」は「阿」、「堂」は「道」、「即」は「速」である。また回向文も書き出しは「右志者」が一般的である。「永禄四年」は西暦一五六一年である。

(2)は将棋の駒「銀将」である。表は文字を彫った跡に墨を入れている。裏は朱墨で「金」である。

(3)は呪符木簡である。墨は流れてしまっているが、文字のあった部分が輪郭の盛り上がりとなって残っている。

(4)は墨は薄くなっており、判然としない。上端を山形に成形している。下端の一部を欠くが、ほぼ完形である。上方は二行、下方は一行である。ひらがな混じり文であろうか。上方一行目と二行目は二から三文字、下方の一行は三から四文字であろうか。

9　関係文献

(財)香取郡市文化財センター『大崎城跡』(香取郡市文化財センター調査報告書七八集　二〇〇一年)

(鬼澤昭夫)